

『法華玄義』における智妙について

曹 良 淑

法華玄義の迹門十妙の中で自行の因に属するのは、境妙・智妙・行妙・位妙の四種であり、仏道を修行するものにとつて最も重要な修行次第であると述べられている。まず境妙とは法華円教の対境たる実相の理法であり、その理法は観にあらざれば明かにならないという。即ち理を解することによって智が生まれるから智妙は実相の理法を把える円智である。従つて境妙の次に智妙を置くという。所謂天台智顗は仏果に達する実相の行を修するを仏因と説いてその方法は、但だ智を以て知るといふ決定的な結論を下している。言い換えれば、天台教学における究極の課題である諸法実相の得知には、煩惱の克服が必要不可欠である。天台において煩惱は基本的に見思・塵沙・無明の三惑であり、この三惑の対治克服の方法として、示されているのが三観である。三惑は結局智慧の働きによって克服されてゆくということで三観を立てるが、三観が空観から仮観へ、仮観から中観へ、段階的に行われる場合を次第三観といい、その所観の対境を隔歴三諦とい

う。しかし円教においては初めよりこの三を一心に融じて観ずるから一心三観という。別教は中道を信じるのであるが、これを初地以上に期し、まずさきに空を觀じ、次に仮を觀じ而る後に中道を觀じる。従つて別教の場合は十地以後より円智にはいるのである。要するに三諦は真理であり、三観は智慧であるから三諦の境を三観の智を以て認識するならば、真如実相の妙理に円教の妙智が合一して、境と智とが即することになるわけである。また即空即仮即中の不次第の一心三観のめざす内面性を見るとすれば、法華經の宗旨を仏の智慧を説く所に見出そうとしていとも考えられる。言い換えれば実慧は妙境を照らすもので、結局智妙にとつて境妙はその内容であり、智妙は本有なる中道実相の理を照らす円智即ち仏智にほかならないわけである。

さて、そうすると法華円教が妙境として挙げる七種の境を照らす円智とは、具体的になにであるのかを智妙の「対境明智」の段の中、円教の不思議不生不滅十二因縁の境を照らす

『法華玄義』における智妙について（曹）

上智觀者觀三受由觸乃至行由二無明。知十二支三道即是三德。豈可下斷破三德更求三德則壞諸法相。煩惱即般若。當知煩惱不闍。般若即煩惱。般若不明。煩惱不闍。何須更斷。般若不明。何所能破。闍本非闍不須於明。如耆婆執毒成藥。豈可捨此取彼。業道即是解脫者。當知業道非縛。解脫即業者脫非自在。業非縛故何所可離。脫非自在何所可得。如神通人豈避非就彼耶。苦道即法身者。當知苦非生死。法身即生死。法身非樂。苦非生死何所可憂。法身非樂何所可喜。如彼虛空無得無失不欣不戚。如是觀者三道不異三德。三德不異三道。亦於三道具一切佛法。何者三道即三德是大涅槃。名秘密藏。此即具三果果深觀二十二因緣。即是坐道場。此即具二因。因。仏因仏果皆悉具足。余例可知。是名上上智觀二十二因緣得仏菩提。 (仏教大系2、424)

と語っている。即ち受は触に因り乃至行は無明に因ると観じて、十二支の三道即ち三徳なると知るならば、三徳を断破して更に三徳を求める必要はない。即ち真妄の法体の本に別がないことを知るとすれば、円融円満に三道即三徳は仏因仏果乃至初後不二位即一切位として煩惱道即般若・業道即解脱・苦道即法身なのである。つまり三道が三徳に異ならないことをすれば、三徳を断じて三徳を求める必要はない。従って四種の十二因縁のなか、前三種は鈍であり、後の一は妙であるが、それらの鈍妙は対立するのではなく、鈍即妙と止揚されて諸法実相の真生命を顯すことになる。

またここで具体的に界外の理を觀じて生死輪廻の根本である無明を断ずるという方法を覗いて見よう。『摩訶止観』の正修章の觀陰入境のところに、

若依三華嚴云。心如工畫師。畫種種五陰。界内界外一切世間中。莫不從心造。世間色心尚究竟尽。況復出世寧可凡心知。凡眼翳尚不見近。那得見遠。弥生広去。不觀界内一隅。況復界外辺表。（中略）縱令解悟。小乘終非大道。（中略）然界内外一切陰入皆由心起。仏告比丘。二法攝一切法。所謂心是。論云。一切世間中但有名与色。若欲如實觀。但當觀二名色。心是惑本。其義如是。（仏教大系 三卷 221）

という。これらの文章から見ると、觀心とは迷妄の日常心において、すべての対立を一体として心に統一還元することを

不可欠の方法として採択している。則ち界内外の一切の陰（五蘊）入（内一六根・外一六境）は心が作り出したもので、界外の理を觀じるという具体的な方法は、結局心を觀よと説かれていた。そして一法に一切法を攝するというのは、即ち心であり、一切世間は、但だ名と色のみであるが、もし実の如く觀じるとすれば、色等の四陰を置いて但だ識陰を觀ずればよいと。その識陰とは、心そのものであり、その心は、惑の本である。従って煩惱の根本である無明を断じるとすれば、円頓障の「初めより実相を緣ず。境に造るに即ち中、真実ならざることなし。縁を法界に繋け、念を法界に一うす。一色一香も中道に非ざることなし」というように、事物の存在価値を正しく認知することが実相の妙理につながり、それは人間の本来の道理として寂滅道場であり、仏性であり、涅槃であるといわれている。しかし因縁境の見え方には浅深の差があるから次位を設けると。

〈キーワード〉 十二因縁、上上智觀、中道実相

（立正大学大学院修了）